

情報と人の関わり方を多角的に考える

あがたまり
安形麻理

文学部図書館・情報学専攻 教授

私の専門は書誌学、書物史ですが、学生たちは自分の興味関心から自由に研究テーマを設定し、多様な視点、手法で研究に取り組んでいます。

私は書誌学、書物史を専門とし、西洋の活版印刷術黎明期におけるグーテンベルク聖書をはじめとする書物の形態と人の関わり方を研究しています。読書の様式や資料保存、書物のデジタル化、デジタル技術の書物研究への活用（デジタル・ヒューマニティズ）などにも関心を持っています。

ゼミ生には、私の専門は気にせず、情報と人の関わり方を扱う限り、卒業論文のテーマは自由に決めてもらおうとにしています。そのため、メディアによる表現形式の違いやブックデザイン、貴重書デジタルアーカイブなど、私の研究主題に近いテーマもあれば、就職活動やファッションをめぐる情報行動、学校図書館の役割といったものもあるなど多様です。学生に的確にアドバイスできるよう、私も常に勉強を怠ることができません。時には他の専門家の助言を受けに学生を送り出したリ、そこに同席することもあります。年度末には、3年生はグループワークの成果を4年生の前で発表してコメ

ントをもらい、4年生からは就職活動と卒業論文の上手な両立についてアドバイスする会を設けています。前後のつながりを作ることで、就職後に助け合えるということもあるようです。

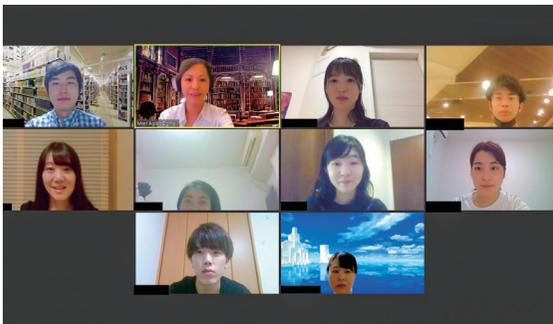
ゼミ内部での議論を大切にすることに加え、春と夏のゼミ合宿には私の恩師やゼミの先輩後輩などにも参加をお願いし、現役学生の卒業論文計画についてさまざまな視点・立場から助言をいただいています。また、専攻では毎年9月に全教員と学生の前で卒業論文の中間報告を行います。今年はすべてオンライン開催です。いずれも学生にとっては緊張することこの上ない場ですが、一つの課題を多角的にとらえる重要性を実感し、他の人に論理的に説明するよい訓練となっています。

ゼミでは、ゼミ生同士が互いに教え合い、学び合い、議論を深めていくための環境づくりを心がけています。学生の新鮮な視点や疑問は私にもよい刺激となっており、まさに半学半教の場だと考えています。

情報と共にある半学半教の場

さとうよしげ
佐藤秀成君 文学部図書館・情報学専攻4年

全国を見ても珍しい専攻である図書館・情報学専攻。その範囲は広く図書館に関することはもちろん、新聞等のメディアやプログラミングまで含まれます。ゼミの教授である安形先生は書誌学が専門ですが、ゼミ生たちが卒業論文で扱うテーマは専攻に関わるものであれば基本的に自由です。今年は図書館を扱う人から同人誌や映画ポスターを扱う人等、それぞれが個性的なテーマで研究しています。先生から助言をいただくことはもちろん、ゼミの最中にはゼミ生同士が質問や助言をすることも多いです。先生やゼミ生から新しいことを学び、そして自分の意見を発信する、半学半教の場がこのゼミの何よりの特徴だと感じています。



Zoomによるオンライン研究会の様子

画像診断で病院診療の質を高め、新しい医療を先導する

陣崎雅弘

医学部 教授

放射線診断科は、診療では病院の質の向上に貢献し、研究ではさらなる人体の可視化と最新の低侵襲治療を追究し、教育では広い視野を持った人材の育成を目指しています。

治療方針の決定には的確な診断が必須であり、医療現場において画像診断の占める役割は年々大きくなっていきます。放射線診断医は、臨床に役立つ診断レポートを作成し、各科とのカンファレンスにて治療方針を主治医と議論することでその決定に関わり、病院全体の診療の質の向上に貢献しています。また、カテーテル等を用いた低侵襲の画像ガイド下の治療も担っています。

研究テーマも、カンファレンスの議論から診療現場のニーズを知り、患者さん側から発想を得る。ようにしています。また、新たな検査法や機器を導入することも重要な役割で、常に最新の画像診断をいち早く患者さんに提供してきました。最近では、被検者が立位のまま撮影できるCT（立位CT）を当科で開発・導入しました。健康長寿が重視される超高齢化社会においては、立位での機能的異常を早期に診断することの必要性は高まると思います。また、新型コロナウイルスの時代では画像検査も非接触が望まれ、遠隔自動操作が可

能な立位CTは、新たな検査の在り方を提示すると思います。さらに、これまでに十分なされてこなかったリンパ系の可視化やリンパ管のカテーテル治療も手掛けています。このように、放射線医学の使命である、さらなる人体の可視化と新たな画像下治療法の開発に教室一丸となって取り組んでいます。

近年の大きなトピックとして、人工知能（AI）研究があります。AIは画像との親和性が高く、当科は早くからAI研究に関わっています。医療用AI開発には多量の良質なデータが必要ですが、病院データの容量の大部分を画像が占めることから、医療情報システム構築にも関わってきました。これからは、他施設とのデータ連携、国際ネットワーク形成などの視点から、病院データのクラウド化が必須になると思われます。デジタル変革時代のオンプレミスからクラウドへの転換は、江戸末期の国際化を見据えた蘭学から英学への転換に似ているように思え、ぜひ慶應義塾大学が主導できるとよいと思っています。

多様な研究を通じて、広い視野を養える環境

よこやまよういち

横山陽一君 医学研究科博士課程4年

放射線診断科は全診療科の疾患を対象としており、幅広い知識と経験が求められます。研究面では、撮像法や診断能の向上に関する研究に加えて、立位CTのような産学連携研究も盛んです。人工知能に関する研究では、理工学部の大学院生と共に学んでいます。また、他科や企業とのカンファレンスに参加し、研究テーマの発想を得て、自身の研究に生かしています。研究を深めるために定期的に打ち合わせが行われ、上下を意識することなく、対等に議論し合うことを大切にしています。全診療科と関わる学内研究、産学連携研究、医工連携研究、医療情報学など多様な研究を行い、広い視野を養える環境がここにはあります。



立位CTの部屋にて